

前期売上4億5000万円にとどまるも、

今期は5億円を目指して農場職員の意気さかん

われわれは法人組織ですから、単年度毎の収支決算、事業計画などを明らかにする必要がありま
す。そのために総会をもつていて、通算第20期と
なる今年は去る6月20日に開催しました。この総
会には、当農場の現状を知ってもらい、同時にこ
れからの方向を理解してもらおう狙いで、取引業者
や、支援機関の方々などを招いています。今回
も30名ほどが見えました。

この総会で、昨年の売上が確定しました。4億
5000万円です。残念ながら目標の5億円には
届きませんでした。バレイショ収穫時の降雨や、
200haの新規取得農地の土壌不良などに泣かさ
れたのが減収の要因です。それでもこれまで最高
の平成5年の4億円を大幅に上回りました。

もちろん、売上が伸びたからといって、手放し
で喜べるものではありません。純益がどうであるか
が問題なのです。そのためには、コスト意識を働
かせなければなりません。

当農場で、このコスト意識がいちばんあるのは、
農場の家計簿を預かっている佐藤里美経理課長
(31)です。東京の銀行で腕を磨いた経験がある
上に、聡明さも兼ね備えた彼女からコストの多さ
を指摘されると、本質をとらえているだけに長年
農場に携わったわれわれでも反論できません。こ
のように、つい売上至上主義になりがちなわれわ
れを戒める役割をもつ彼女の存在は貴重です。

経理ではなかなか厳しい佐藤課長ですが、青森
農業という県内の農業雑誌に寄せたエッセーの中
で、最後にこんなことを書いています。

「スーパーL資金の返済が終わる10年後は左うち
わの生活でありますよーに！」

さて、総会で確認した今年の目標は作付け面積
で420ha、売上高で5億円です。農地取得のた
めに借り入れたスーパーL資金の返済も始まりま
す。何としても、この目標を達成すると、農場員
すべてが張り切っています。

天候回復し農作物に勢い

前号で今年の天候が極めて不順であることを紹
介しましたが、その不順天候もようやく7月24日
あたりから回復してきました。これに伴って、作
物の生育遅れが回復しつつあり、加えて夜に雨が
降って、日中晴れるという日も続き、ここ(8月
上旬)にきて生育に勢いができています。

バレイショは開花時期が例年より10日以上も遅
れ7月中・下旬になりましたが、その後の肥大期
は天候に恵まれて、いけそうな感じがしています。
ダイコンも、大豆、ニンジンも、ナガイモも天
候回復を待っていたかのように、莖葉が生き生き
としてきています。こうした作物が、白神山や
岩木山の麓で健やかに伸び始めているのを見るの
は、農業人でなければ味わえない喜びです。

100haを超え最も面積の多い小麦の収穫は、
7月20日から始まり、30日に終わりました。小麦
の収穫では、商品価値のなくなる穂発芽をもた
らす降雨が強敵です。しかし、おおむね天候に恵ま
れ、汎用型コンバイン5台を投入して、適期に収
穫できました。刈り終えた麦は、農場本場から約
70km離れた農協のライスセンターへダンプロッ
クでただちに運び込み、乾燥仕上げしています。

適期刈りできたとはいえ、収量、品質は昨年よ

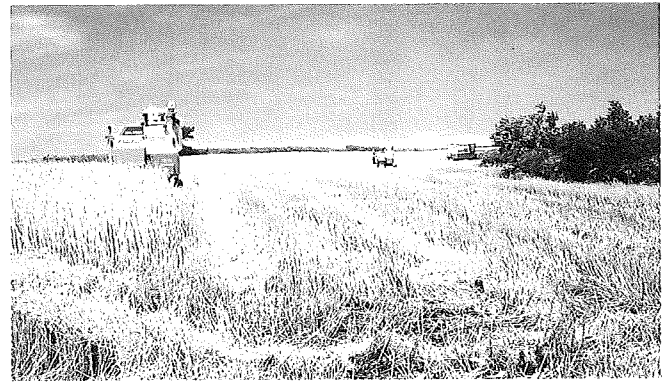
りいまひとつ見劣りしました。播種時の降雨、種
子の発芽不良、登熟期の日照不足などが要因です。
初めて作付けた岩木山麓では、皆無作となった
ところもできました。残念なことです。

この小麦収穫の最盛期に、農場は悲しみに覆わ
れました。小麦担当の竹内雅孝の長男智則(20)
が26日、八戸市の海岸で高波にのまれて、帰らぬ
人となったのです。一緒に農場を築き上げた佐々
木君夫、竹内雅孝、それに私は競争するように、
それぞれ3人の子供を育て上げたのですが、その
中で智則がいちばん、この農場を気に入っていた
ようなのです。小さい頃から農場にきて遊び、手
伝い、高校、大学に入ってから夏休みには農場
へやってきて、農作業をしていたのです。性格も
ハキハキし、社交的で誰からも愛されていました。
今年も間もなく、農場へ顔を出すと、思ってい
た矢先の事故でした。農業系か工業系か迷った末
に、とりあえず工業系大学に入っていました。が、
私などは密かに、農場のよき後継者になるのでは
ないかと思っていました。竹内の無念さを思いや
ると、言葉もありません。

しかし、生き物である作物は、こんな悲しみを
待つてくれません。いまは小麦だけでなく、1・
5haのキャベツの収穫期にもなっているのです。
キャベツは、昨年、JTとの契約でしたが、今
年はそれがないため思い切って市場出荷すること
にしました。収穫したものは、コンテナに入れ、
バレイショの冷蔵庫を活用し、差圧予冷のよう
なやり方をして貯蔵性を高めました。

ものは堅く仕上がり、よかったです。市況
は大暴落でまるっきりの赤字になりそうです。大
腸菌O157騒動でキュウリ、レタスなどのサラ
ダとして生で食べられる野菜は、消費が減退して、
値崩れを起こしているのです。キャベツもその影
響で荷動きが極めて鈍くなり、暴落したのです。
何としても恨めしいO157です。それでも、8

上：O-157騒音が恨めしいキャベツ畑
下：栽培面積100haを越す小麦。今年は
収量、品質とも昨年を下回ってしまった



ダイコン需要増大

私の担当する漬物用ダイコンは植え付けが7月上旬から8月末まで、収穫は11月中旬までかかります。今年は、最大納付先のタクアン製造メーカーが前年の倍近くの量を希望しています。外国からの輸入攻勢が強まる中で、こうした注文の増加はうれしい限りです。そのメーカーに聞くと、国産志向の強まりとともに、製品には黄金崎農場産と書かれ、それが消費者に安心感を与えるためだとのことです。メーカーが国産にこだわってくれるのであれば、われわれはそれに応えなければなりません。

こうした需要増も背景に、ダイコンは、農場だけでなく、ほかの農家にも委託生産してもらっています。遠く、秋田県や、下北半島などの農家と契約を結び、大型機械が必要な作業はわれわれがやり、ほかの細かい管理は農家にやってもらおうというように、大型法人と個別農家とのドッキング方式による生産システムです。この方式によるものは今年30ha弱に達しています。

こうした大規模農場と小規模農家との連携した生産方式は、21世紀農業のありかたのひとつであるという感を私はもっているのです。

人材新規参入

今年、家事都合などで2人の若者がやめました。一方、4人の男が新たに仲間入りしました。七戸秀吉(41)、吉田博(38)、藤田和弘(24)、山崎哲也(27)です。吉田は農家出身ですが、ほかの3人はいずれも非農家出身です。時代が時代だけに、農家出だるうが、非農家だるうが関係なく、やりたい者が農業に就くべきだと私は考えています。吉田と山崎は職業安定所を通じて、藤田

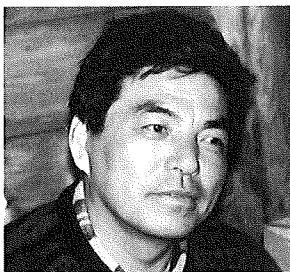
はわれわれの農場物語を読んで、やってきたのです。農業というものに魅力を感じる者、われわれの大農場づくりに共鳴する若者、そういう人たちと仲間になって、これからの農業を切り開いていくことにしています。

8月3日には、中国からの研修生がやってきました。湖北省出身の陳礼軍(31)という若者です。中国からの受け入れは今年で5年目となりますが、一生懸命勉強して、やや立ち遅れている中国農業に役立ててほしいと願っています。

農場誕生から多くの人の支え、応援があったればこそ、今日の農場があると、私は思っています。それだけに、これからも多くの人たちとつながりを持ち続けていくことにしています、こうした研修の引き受けも行なっているのです。

21年前の農場開設以来、毎年欠かさずに行なってきた8月8日の農場祭は、20歳の若さで逝ってしまった竹内智則を弔うために、思い切って中止にしました。この祭りは200人以上が集まる農場最大の行事なのですが、農場を愛してくれた智則のことだけに、中止は当然の措置なのです。

でも、父の農業にあこがれた智則への最高の供養は、われわれが描いている新たな農場を作り上げることだという気がしています。この夢に向かって、星になった智則も加え、農場で働く人たちはこれからがんばっていくことにしています。



きむら・しんいち/1950年9月生まれ。青森県立五所川原農林高校卒業。4Hクラブの仲間の佐々木君夫、竹内雅孝とともに「大規模で、企業的で、給料をもらう」農場を夢見て、76年農事組合法人黄金崎農場を設立